

# “アタッチメント” 雑感

浅見千鶴子

「アタッチメント (attachment)」という用語も乳幼児研究の分野で、最近はずっかり根を下ろしてきたと思う。本来の意味は付着とか附属物であって、何かにくっつくことをいう、それが二次的に転化して、愛着・執着の意味をもつ、母子関係において用いられるとき、attachment behavior を愛着行動と訳するのが、一般的になった。

もう、十四、五年も前になるが、卒業論文に「人見知

り」をやりたいという学生がいて、いろいろ洋書の文献を探っているうちに、attachment という用語を見つけて、何と訳したらよいかと質問されたことがある。‘‘fear of strange’’ が「人見知り」に当ることはわかっていたが、‘‘attachment’’ ということははその当時までのわが国の乳幼児の研究書や論文には全く使われておらず、おそらく、欧米の研究においても、初期の頃はそのことばも殆ど問題

にされていなかったのではないかと思われる。それが問題にされていたならば、当然、日本の学者たちも看過しているはずはないからである。

私はその頃まではあまり、乳幼児や精神発達については深い関心をもたず、専ら、行動とか学習に熱中していたので、乳幼児専門の研究者ならばすでによい訳語を御存知かと考え、ある教授におうかがいを立ててみた。ところがその教授も「さあ、知りません」ということで、心にかかりながら、しばらくそのままになってしまった。もちろん、当時、出版されていた心理学事典や百科事典などには載っていないかった。

早稲田大学の小嶋謙四郎氏がそれまでの母子関係に関する内外の諸文献を集め、分析し、まとめられた労作「乳幼児期の母子関係」を出版されたのは今から約十年前前である。(一九六八年医学書院、これによると、乳児と親の関係は主に「依存」関係として捉えられていたが、一九五七年ボウルビィ (Bowlby, J.) が、はじめてその考え方を脱

却し、新たに“psychological attachment”という呼び方を提唱したのだという、それ以後“attachment”という用語が、欧米の研究者の間に関心をひき、時に使用されはじめたらしい。私もあの学生に質問されて以来、注意して文献を探してみると“attachment”を主題にしている研究が急速に増えてきたことに気付いた。

乳幼児の研究は最初、小児科医や教育者などの実践家によって始められた。実践的必要と関心に根差した異常児の研究から手をつけられている。ホスピタリズムの問題も、当時の小児科医や保育者を悩ませた難問であったろう。母親が病気になったり、いなくなったりして、家庭で保育することのできない幼い子ども達を多数、収容している施設では、如何に栄養や衛生条件を注意してととのえても、子どもたちの心身の発達がすぐれず、どこか人間味のかけた未熟なパーソナリティーを示すのであった。

スピッツ (Spitz, R.) やボウルビィ等がこれらの問題にとり組み、母子分離や母性喪失 (maternal deprivation) から来る発達障害であることを見出し、乳児期の養護の条件を再検討することになった。ボウルビィの“Childcare and the Growth of Love.” (註一) 1951 がその成果である。しかし、

ここまでのところでは、まだ、アタッチメントという概念は出ていなかった。ボウルビィはその後、乳児期に母親と離別した子どもたちの人格発達について組織的な研究を行ない、理論的考察を加え、大作「Attachment and Loss」<sup>(注2)</sup>、1959を著わしたのである。彼は愛着行動を「母性的人物へ最も接近した状態を保持するように幼い子どもを導く行動」としている。アタッチメントは「母親に対する子どもの結びつき」と呼んでいる。

古来、親が子を育てる行動について、その献身的、犠牲的な振舞いを母性愛の現れとして、人間から様々の動物にまで感動的な逸話が集められ、讚美されてきた。育児法は多くの人々の関心を集め、どのような子どもにも育てるか、専ら親側の都合で考え、子どもは専ら受動的にしつけられるものとして、いろいろのことが提案された。すなわち、時間ぎめの授乳法とか、抱きぐせをつけない法とか、自立させるために早くから独りでねかすとか、等々、今考えるところがおかしなことが大まじめに論じられた時代もあったのである。

アタッチメントとは幼弱な子どもも、ただ受動的な存在ではなく、養護を完了してもらうために、子どもの方から

積極的に要求し、行動する能動的なものであることを意味している。エソロジー（比較行動学）の発展から、離巢性の鳥類や哺乳類の子どもたちが、出生間もない頃から、如何に能動的に母親の後をくっついて移動するものであるかが明らかにされた。卵からかえったばかりのアヒルのヒナは初めて眼にうつった対象をその姿を見失わないように一生懸命追いかける。それは自然の条件では母鳥の姿である。ローレンツ（Lorenz, K.）はこれを「刷り込み」(Imprinting)と名づけた。

<sup>(注3)</sup>ハーロー（Harlow, H.）の実験で、生まれて間もない赤毛ザルの赤ん坊を母ザルから離して、代りの人形を与えて育てた。人形は針金で胴体で作られていて、一つはそのままだが、もう一つの方はタオルのような布で胴体をくるんである。ミルクは針金人形の胸に乳首がとりつけられのめるようになっているが、布人形の方にはない。この二つの人形があると赤ん坊ザルは布人形の方によく抱きついて一日の大半を過ごす、空腹になると針金人形の方へいき、ミルクのみ出す、満腹するとまた布人形の方へ戻り、抱きついて過ごす、これは空腹をみたしてくれるものよりも、何も与えないが、暖かいやわらかい肌ざわりの方が赤ん坊ザ

ルにとつて、母親として抱きつき、アタッチメントを形成するということを示している。生まれて間もないのに赤ん坊ザルは自分から積極的になじつとして動かす何もしない布人形に抱きつきにいくのであり、手ざわりの荒い針金人形の方を能動的に避けるのである。そこに能動的な選択が行なわれるのである。

人間の赤ん坊は最初の間は無力で全く受動的に一切を母親の養護に任している。そこにはまだ能動的特徴は見られない。しかし、二、三か月頃になると近づく人の顔に対して、無差別ではあるが微笑反応を示し、親たちをひきつける。六か月を過ぎると、特定の親しみをもつ対象と見知らないものが区別され、親しい相手に対しては声をあげ、手足をバタバタさせて積極的なよろこびを表明する。見知らない馴れない人が現われると顔をそむけたり、かくれようとしたり、恐れて泣き出すようになる。まだ歩けないうちにも、能動的な反応で、アタッチメントを形成していくことがわかる、アタッチメントの対象は初期の段階で

は無特定であるが、やがて特定の対象に絞られる。それには幾つかの条件が必要である。アタッチメントを十分に形成できない子どもはその後の発達に重大な支障を来すであろうことが予測される。しっかりとアタッチメントが形成できた子どもは能動的に自分の人生をきり開いていくことができる。その意味で乳幼児期は人の運命を二分するほどの重要性をもっているといえるのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)

注1 黒田実郎訳「乳幼児の精神衛生」岩崎出版社

注2 黒田実郎 大羽泰 岡田洋子共訳「母子関係の理論

論 ①愛育行動」岩崎出版社

注3 Harlow, H. *Mother Love* (film)